

ペルシア語の不定詞の歴史によせて

野 田 恵 剛

§1. NP¹⁾の不定詞は語尾 -tan, -dan をもち、前者は無声子音の後に、後者は母音またはソナントの後にあらわれる。たとえば raftan 「行く」、kardan 「行なう」、šudan 「なる」。不定詞は直接 OP にさかのぼりうる動詞形の一つである。OP の不定詞の語尾は -tana- で現存の OP 碑文では čartanai ‘to do’, kantanai ‘to dig’ のように与格の形でしか例証されない。MP では -ai という音群が消失し母音およびソナントの後では -t が有声化してこれが NP にひきつがれた。

NP には上の不定詞の他に上形の末尾の -an をおとした不定詞形 (raft, kard, šud) があり、これは short infinitive, infinitif apocopé などとよばれている。我々は便宜上 kardan のような不定詞を Inf. I, kard のような不定詞を Inf. II とよぶことにしよう。

Inf. II の起源に関し、Darmesteter⁴⁾はこれが抽象名詞 -ti にさかのぼるとし、NP の khvâham kard は OP では hvâdâmi *kařtim 《je désire action de faire》であったと考えた。更に非人称的に用いられた shâyad 《être permis》が不定詞とともに用いられるのは不定詞の名詞的性質によって説明され、この場合 shâyad は古い verbe déponent を表わし、この語はアヴェスターではまさに抽象名詞 -ti の与格形と使用されていることを指摘し、その例として khshayêtéé... apañharshtéé ‘il peut remettre’ (Vd. 5. 78) をあげる。そしてこの構文と NP shâyad hisht との間には構文上の変化はなく、ただ shâyad が非人称的に用いられているという差しかないと主張する。このアヴェスターの例による主張には Salemann⁵⁾も賛意を表わし、Horn⁶⁾も Inf. II がどのような古代イラン語形にさかのぼるかはわからないとしながらもおそらく抽象名詞 -ti にさかのぼるであろうと考えた。Horn は古代イラン語の抽象名詞 -ti と不定詞 -tæ が、たとえば前者は名詞 zād 「誕生」に、後者は Inf. II zād (<zādan 「生む」) となって NP においては形態的に融合したとする。

小論では11世紀末に成立した Qābūs Nāma 『カーブースの書』(QN)⁷⁾にあらわれる不定詞の事例を中心としてペルシア語の不定詞の歴史をたどってみることにしたい。なおここでは「古典ペルシア語」(Classical Persian)にかえて「初期近世ペルシア語」(Early New Persian)という語を用いる。

§2. bāyistan

MdP bāyestan 「ねばならない」は次のように用いられている。

- (1) *baccehā bāyad (ke) emšab zūd bexāband.* 「子供たちは今夜早く眠らなければいけない」
- (2) *bāyad be ū xabar dād.* 「彼に知らせなければならない」

bāyestan は非人称動詞であって 3 人称単数形しかもたない。いま現在形 *bāyad* で以下言及すれば、MdP では *bāyad* は ke-Cl. および Inf. II と構造をなす。Inf. II と構造をなす時は全くの非人称表現であって主語表現を欠く。(2)参照。ke-Cl. と構造をなす時は ke-Cl. 中の動詞は当然主語人称変化をした定動詞である。しかも ke-Cl. 中に Subj. があればそれは *bāyad* の前位置を占めるのが普通である。(1)参照。そこでこの構造は 〈Subj. + *bāyad* + (ke) + 定動詞〉となり、ここでは *bāyad* は時制に対して以外は不変の「助動詞」的に用いられ、そのことを除けば一般の人称動詞構造とかわらない。その ke-Cl. 中の Subj. はここでは定動詞の Subj. というよりもむしろ *bāyad* の Subj. とみなされていると思われる。というのは主語表現を必要とする時は *bāyad* + Inf. II は用いられず、必ず *bāyad* + ke-Cl. が用いられるからである。したがって MdP では *bāyad* 自体は不変であるにもかかわらず *bāyad* 構造は非人称構造と人称構造に分化しているといえる。ところが ENP ではそのような分化が十分成立しているとはいえない。

非人称動詞 *bāyistan* は QN ではもっぱら *bāyad* の形で用いられているので以下の分析においてもこの形のみを対象とした。

bāyad は Obj. を必要とするが、それによって *bāyad* 構造を分類すれば以下のごとくである。

a. Obj. が名詞の場合

- (3) *har kārī rā hadd u andāza bāyad.* (p. 52) 「なにごとにも程度が必要だ」
- (4) *agar xādim bāyad, xʷad-xādim-karda ba dast ār.* (p. 56) 「もし奴隷が必要ならば自分で奴隷になった者を手に入れよ」

b. Obj. が Inf. I で *bāyad* の前位置の場合

- (5) *suvārī bisyār kardān na-bāyad, ki muxātara bāšad.* (p. 54) 「たびたび馬に乗ってはいけない。危険だから」

c. Obj. が Inf. I で *bāyad* の後位置の場合

- (6) *mā rā kasī bāyad firistādan tā ān ʷulām rā bixarad?* (p. 46) 「我々はその奴隷を買うために誰かを遣らなければなりませんか」
- (7) *suxan-i in qaum rā ba gūš-i dil bāyad šinūdan.* (p. 29) 「これらの人々の言葉を心の耳できかなければならない」

d. Obj. が Inf. II の場合

- (8) *suhbat bā ān gurūh bāyad kard.* (p. 11) 「あの人たちと話さなければならない」

(9) pušt u rū-yi suxan bibāyad *dānist*. (p. 26) 「言葉の裏表を知らなければならない」
e. Obj. が ki-Cl. の場合

(10) bāyad *ki* har du ruz yak bār šavi. (p. 49) 「二日に一度行くようにしなければならない」

(11) mardum bāyad *ki* dar āyina nigarad. (p. 22) 「人は鏡をみななければならない」

ENP では bāyad はまだ「必要とする」というかつての意義をとどめている。それは a のように Obj. として名詞をとる場合があることから明らかである。もっともこの例は少なく他の表現、たとえば *hājat būdan* 等によってこの意味があらわされることが多い。名詞以外で構造をなすのは Inf. と ki-Cl. でありこちらの方が一般的である。

bāyad が Inf. I と構造をなす場合 Inf. が bāyad の前位置の場合 (b) と後位置の場合 (c) の二つがある。前位置の例は数例で後位置を占める方が多い。

Inf. II と構造をなす場合 (d) には前位置の例はなくすべて後位置である。

a ~ d では論理的主語は Dat. (rā) であらわされる。(3), (6) 参照。人称代名詞の場合前接 (enclitic) 形であらわされた例がわずかにある。たとえば、

(12) ha-gizāf maxar tā ba-gizāf na-bāyad-*at* furūxt. (p. 30) 「むだに売らなくてもよいようにむだに買うな」

(13) agar vaqti bāyad-*at* xwardan, ... mardumān turā bad-ān saugand rāst-gūy dārand. (p. 61) 「もしいつかお前が誓わなければならなくなった時、人々はお前をその誓いで正直者とみなすだろう」

Obj. が節の場合は接続詞 *ki* 'that' を介して bāyad に後置されている。e 参照。(11) のように本来 ki-Cl. 中にある要素が bāyad 前位置を占める例がすでに ENP にある。

a ~ e のうち d bāyad+Inf. II が最も多く生じ、c bāyad+Inf. I と e bāyad+ki-Cl. がほぼ同数で d の約半分である。a と b はまれである。

NP bāyistan は MP では abāyistan (<apāyistan) で、NP 形は規則的な音韻変化により MP 形の語頭の a- が失われて生じた。⁸⁾ abāyistan の 3 人称単数現在形は abāyēd でほとんど Inf. I と構造をなすが Inf. II と構造をなす場合もあるといわれている。

(14) ku-mān čārag xwāstan abāyēd. (Ardāy Wirāz Nāmag 1.23) 「我々は方法をさがさなければならない」

(15) ud nūn ruwān garān pādifrāh abāyēd burdan. (ibid. 39.6) 「そして今や霊は重い罰をうけなければならない」

(16) nūn ēn ruwān ēdōn garān pādifrān abāyēd burd. (ibid. 23.9) 「今やこの霊はこのように重い罰をうけなければならない」

MP では Inf. は後位置の方が多¹⁰⁾い。

そこで *bāyistan* 構造の推移を概観すれば次のようである。

MP では *abāyēd* はもっぱら *Inf. I* と構造をなしたが *Inf.* は *abāyēd* の後位置の方が多く、さらに時折 *Inf. II* と構造をなしたようである。(16) 参照。この他に接続詞 *ku* に導かれた節と構造をなすこともある。ENP では *Inf. I* が *bāyad* の前位置の場合はまれとなり、後位置が一般的で、さらに *Inf. II* の広汎な使用をみる。また MP でまれな節との構造も次第にその勢力をましつある。

この MP から ENP への変化において注目すべきことはやはり *Inf. II* が広く用いられるようになったことであろう。だがここではまだ *Inf. I* と競合している。ENP の状況は Mdp への変化において MP から ENP への変化よりも大きな変化をうけた。それは著しい *Inf.* の廃用の傾向である。ENP ではまだみられた *Inf. I* は完全に消滅し、ENP で一般化していた *Inf. II* は純非人称構造として(2)にみられるようにその用法が大きく制限された。ENP の *Inf.* 構造にかわって一般化したのが *Ki-Cl.* 構造であって、この構造は徐々にかつて *Inf.* 構造が占めていた領域を侵食し、*Inf. II* 構造が非人称構造として一般化したのに対し、人称構造として一般化した。ただこの場合 *bāyistan* 自体は ENP で過去形において散発的にみられた人称形を除いて、ついに人称形を發展させなかった。

ところで不定詞はその性格上非人称的あるいは無人称的である。ENP でも *bāyad* は非人称動詞であったが、それはさらに *Inf.* と結びつくことで相乗的にその非人称性をましていたと考えられる。Mdp にいたるまで非人称表現として *bāyad+Inf. (II)* が保持された一因はここにある。他方 *ki-Cl.* の發展とともにみのがしてはならないのは *Dat.* 指標辞であった *rā* が *Dat.* の機能を失っていったことである。これによって *bāyad+Inf.* は完全に主語表現を失ない、Mdp にみられるような *Ke-Cl.* との分化が成立する。

ENP では *rā* は *Dat.* と *Acc.* との両方の機能をもって広く用いられた。NP *rā* は MP *rād*, OP *rādi 'wegen'* で、OP の意味から判断して歴史的には *Dat.* の機能の方が *Acc.* のそれよりも古いとみられる。*Acc.* の機能はすでに MP でもみられ、ENP ではこの二つが競合している。

rā は *Acc.* の指標辞として次のように用いられる。

(17) *az mallāhān yakī bad-ān sūrāx rasīd. Fath rā bidīd.* (p. 18) 「水夫の一人がその穴に着き、フットフを見た」

Dat. の指標辞としては様々に用いられたが主な用法は次のごとくである。

f. 所有構造

(18) *ū rā ispahsālārī būd ki har ci gufti bišīnūdī.* (p. 54) 「彼には、(その男の) 言うことなら何でも聞く将軍がいた」

(19) *az bahr-i ān ki mā rā du cašm ast...u tu yak cašm dārī.* (p. 54) 「というのは我々

には目が二つあるが、あなたには一つしかないからです」

g. guftan 「言う」

(20) mādar-am *rā* bigūyid! (p. 84) 「私の母に言え」

(21) qissa-yi vām dādan rāst *ba* man bigūyi! (p. 92) 「金をかした時のようすを正直に言ってみよ」

h. dādan 「与える」

(22) agar dušmanī az tu zīnhār x^vāhad,...ū *rā* zīnhār bidih. (p. 83) 「もし敵がそなたに保護を求めたら保護を与えよ」

(23) mā īn mulk *rā* *ba* bigāna dihīm. (p. 56) 「我らはこの王国を他人に与える」

i. āvardan 「もってくる」

(24) āngāh mardum *rā* ta'ām ār! (p. 40) 「それから人に食事をもつてこい」

fのように Dat. の指標辞 *rā* と būdan 'to be' をもって「所有」を表現する形式は他の印欧語にも認められる表現形式であり、ENP では広くこの構造が用いられた。この構造は古く OP までさかのぼりうる。たとえば, Dārayavahauš puçā anyai-či āhanta. 「ダリウスには他にも息子があった」, avahya Kanbūžiyahya brātā Bardya nāma āha. 「このカンビュセスにはバルディヤという名の兄弟があった」。また MP にも同様の構造がある。ēn zan kēš yak pust¹¹⁾ ast. 「息子が一人あるこの女」, Ardawān rād kanīzagē abāyišnīg būd. (Kārnā-mag)¹²⁾ 「アルダワーンには美しい腰元がいた」。MP では前者のように人称代名詞の前接形を用いる構造と後者のように rād によるものがあったが、ENP では前接形による方は見出されず(少なくとも QN では) *rā* による方がふつうである。

OP 以来広く用いられたこのような〈Dat.+ 'be'〉タイプの所有構造は ENP でも多く使用されているがすでにここでは動詞 dāstan 「持つ, 所有する」による表現の出現をみて, dāstan による所有構造が〈-rā-būdan〉による所有構造と競合している。(19)参照。ENP ではまだ dāstan が所有構造に用いられることは少なく、「思う, みなす」の意味や定句構造, たとえば nigāh dāstan 「保つ」に用いられることが多い。しかし MdP にいたる過程で〈-rā-būdan〉構造は完全に消滅し, dāstan タイプのみが一般化した。

このように〈Dat.+ 'be'〉タイプの所有構造が印欧諸語の歴史の中で 'have' タイプの構造, すなわち「所有者」が動詞 'have' の表面的主語, 「所有されるもの」がこの動詞の表面的目的語であるような構造によってとってかわられることはしばしばあることであり, ペルシア語の歴史もその傾向を示しているのである。そしてこの所有構造の変化にみられる *rā* の消失は būyad +Inf. が būyad+ki-Cl. によってとってかわられる変化にみられる *rā* の消失と結びつき, どちらも「人称構造」への発展を示していると思われる。

また *rā* は guftan 「言う」, dādan 「与える」等の動詞と共によく用いられたが, ここでも

すでに MdP で一般化している前置詞 *ba* と競合している。(20) と (21), (22) と (23) 参照。ENP で *rā* であらわされる時に MP では *rād* ではなく他の前置詞であらわされるのが普通であり、ENP では相当広く *rā* が用いられたことを示している。

(25) *harw cē-t did rāstihā ō amā gōw!* (AWN 3.14) 「そなたが見たことをすべてまがいなく我々に語れ」。(20) 参照。

以上のように、ENP に広く分布していた *rā* 構造は、人称構造化をたどったり、前置詞構造によっておきかえられたりして、わずかの例外を除きほぼ完全に Dat. の機能を消失し、MdP では Acc. の指標辞として特定化した。

§3. *tuvānistan*

tuvānistan (MdP *tavānestan*) は「できる」を意味し、前述の *bāyistan* と同様 ENP において不定詞構造をなした動詞に属する。この動詞は MP では *tuwān* の形で用いられ、*tuwān* は古代イラン語の語根 *tav-* ‘to be strong’ にさかのぼる。*tuwān* は形容詞として ‘mighty, powerful, energetic’ を、非人称動詞として ‘it is possible, one can, is able to’ を意味した。¹⁴⁾

MP には *tuwān* の他に *tuvānistan* という形も存在するが後者は前者に *-istan* という接尾辞が付加された形で、この形は古い Book Pahlavi には見出されず MP 内においても比較的新しい形である。¹⁵⁾ この *-istan* という接尾辞はペルシア語の動詞形成接尾辞の中では非生産的な部類に属し、この接尾辞で形成された動詞は少ない (*dān-istan* 「知る」, *šāy-istan* 「ふさわしい」等)。

tuvān および *tuvānistan* は QN において次のように使用されている。

- (1) *ham parhīz kardān bituvān cūn xirad rā kār farmāyī.* (p. 44) 「知恵を働かせれば (飲酒や冗談を) つつしむこともできるだろう」
- (2) *hama rūz šikār natuvān kardān.* (p. 52) 「毎日獵をすることはできない」
- (3) *ba xirad māl tuvān sāxt u az māl xirad natuvān sāxt.* (p. 16) 「英知によって富をつくることはできるが、富から英知をつくることはできない」
- (4) *tā tuvānī, xʷad rā nigāh dār u az ‘āšiqī parhīz kun!* (p. 45) 「できるだけ身を持ち、恋をせぬようにせよ」
- (5) *agar bibīnī ki az bīxiradī u bīhunarī nām u nān ba dast tuvānī āvardān, bīhunar u bīxirad bāš!* (p. 20) 「もし英知や教養がなくても名声や糧が手に入ると思うなら、なしでおれ」
- (6) *māl-i xiradmand duzd natuvānad būrd u āb u ātaš halāk natuvānad kard.* (p. 16) 「賢者の富を盗人はもち去ることができないし、水や火もこわすことはできない」

上例にみられるように *tuvān*, *tuvānistān* は Inf. I, II と構造をなすが, *bāyistān* の場合と同じく Inf. I と構造をなすことの方が多い。その位置は *tuvān* には(1)のように Inf. I に前位置の例があるが, *tuvānistān* にはその例がなく一般に後位置である。(4)のように *tuvānistān* は意味の明らかな時には Inf. が省略され独立の動詞のように用いられることもある。特に注目すべきは MdP とは異なって ki-Cl. と構造をなすことが全くなく, Inf. とのみ構造をなしていることである。また *tuvān* が主語表現をもつ例はない。

MP では *tuvān* は次のように用いられている。¹⁶⁾

(7) *man zatan nē tuvān*. 「私は殺すことができない」

(8) *martōmān... ayāftan u dānistān nē tuvān*. 「人々は得ることも知ることもできない」

(9) *šmāh xvēš rād nē tuvān xvāstān*. 「あなたたち自身は望むことができない」

tuvān は Inf. I とのみ構造をなし, その語順は Inf. + *tuvān* の方が逆の場合よりも多い。¹⁷⁾ 非人称動詞として Subj. は斜格形 (Dat.) であらわされている。一方 MdP では次のようである。

(10) *mītavānīm (ke) be ū telefon konīm*. 「私たちは彼に電話できる」

(11) *mītavān īn kār rā behtar kard*. 「この仕事はもっとうまくできる」

MdP では Inf. I と構造をなすことはなく, *mītavān* + Inf. II は「非人称」構造として, *tavānestān* + ke-Cl. (ke は多くの場合省略) は「人称」構造として分化している。

すでに MP で非人称動詞 *tuvān* は接尾辞 *-istān* の付加によって *tuvānistān* という人称動詞を形成しており, MdP の *tavān* と *tavānestān* の分化の源流をここに見出すことができる。MP では非人称動詞の論理的な主語は斜格 (Dat.) におかれ, *tuvān* にも上例以外に *ka-tān tuvān* 「あなたにできる時」のように論理的な主語が人称代名詞の斜格形であらわされる例がある。ENP ではこの斜格は §2 でものべたように (代) 名詞 + *rā* (人称代名詞の場合前接形もある) によってあらわされるが, *tuvān* については論理的な主語が斜格であらわされた例は QN にはない。これは ENP ではすでに *tuvān* と *tuvānistān* の非人称構造対人称構造という分化が完了していたことを示していると思われる。

ENP で *bāyad* が ki-Cl. と構造をなしていたことはすでに見たとおりである。この時期に *tuvān* が Inf. としか構造をなしていないことは後の *tuvān* 構造の発展と Inf. の性格からいって理解しようとしても, *tuvānistān* が ki-Cl. と構造をなしていないという事実は興味深いものである。それはおそらく上述のように MP *tuvān* は *tuvānistān* という人称動詞をつくりあげていたので, その上に Inf. をも人称化する, つまり ki-Cl. 構造を用いるという二重の人称化を必要としなかったためであろう。

tuvānistān 形成以後は人称構造による圧力によって特に主語表現が侵されていったと考えられる。そこで ENP にみられるように Subj. が不要な場合は非人称形 (*tuvān*), 必要な場合は人称形 (*tuvānistān*) と分化が行なわれた。すでに ENP では MP で多かった Inf. + *tuvān* の

語順は逆転し, *tuvān(istan)+Inf.* の語順が一般化している。この語順によって *Inf.* はより動詞的機能をおび, *ki-Cl.* への道がひらかれた。*tuvānistan* は非(=無)人称的 *Inf.* を廃して *ki-Cl.* と構造をなすことで人称構造化を達成してゆくが, これには *bāyad+ki-Cl.* や節 (*ki-Cl.*) を *Obj.* とする他動詞が強い影響をあたえたと推測される。他方 *tuvān* は無人称的な *Inf.* との結合関係を強めることで *tuvānistan+ki-Cl.* との差を明瞭にし, *MdP* にみられる対立が完成する。

§4. *xvāstan*

xvāstan は「欲する」を意味する動詞であるが, *NP* においてはそのような「本動詞」としての用法の他に未来時の「助動詞」としての用法が出現する。

QN で *xvāstan* は次のように使用されている。

a. *Obj.* が名詞の場合

- (1) *agar fisāna xvāhad, fisāna gūy!* 「もし(聴衆が) 物語を望んだら, 物語をしてやれ」
- (2) *har cand ki bīstar-i javānān rāhhā-yi sabuk xvāhand u hazīn.* (p. 43) 「もっとも若者はたいてい軽く悲しい調べ(の方)を望むけれども」
- (3) *tā cunānki xvāhand, ba murād-i xvād nān bixvarand.* (p. 40) 「好きなだけ思う存分たべるように」

b. *Obj.* が *ki-Cl.* の場合

- (4) *cūn xvāhī ki burda xarī, hūšyār bāš!* (p. 62) 「奴隷を買いいたい時には慎重にせよ」
- (5) *agar xvāhī ki munkir šavī, bituvānī.* (p. 99) 「もし反対しようと思えばできる」

a, b のような構造は名詞(句), および節を *Obj.* とする他動詞にみられる一般的構造である。たとえば *dānistan* 「知る」。(3) のように *Obj.* が略されることもある。

c. 未来時の「助動詞」の場合(未来時は *xvāstan* のアオリスト+*Inf. II* で形成される)

- (6) *agar bidānistamī ki marā u turā pāygāh yakī xvāhad būd, hargiz dar bādiya nayāmadamī.* (p. 13) 「もし私が, 私とお前の地位が一つになると知っていたら, 砂漠へ来なかったであろう」

しかしながらこの未来時は *ENP* では十分確立していなかったようである。以下この問題について考察するが〈*xvāstan* のアオリスト〉は便宜上 3 人称単数形 *xvāhad* (*MdP* *xāhad*) であらわす。

MdP では未来時は十分確立しているものとみなしうる。それは未来時は必ず *xāhad+Inf. II* という形をとるのに対し, *xāstan* は「欲する」を意味する時には *mī-/be-+xāhad* という形をとり, そして決して *Inf. II* とは構造をなさないというもっぱら形式的な対立が厳密であることを根拠とするものである。これに対し, *ENP* では接頭辞 *mī-(bi-)* は十分文法化されているとは

いえず多くの場合欠けるため現在と未来を区別する有効な指標を所有していないことと, xʷāhad が Inf. I とともに構造をなすことがあるので未来時の独立した時制としての存在は疑わしいとされることがある。

ENP で未来時が独立した時制としての位置を占めていたかどうかを検討する時に問題となるのは xʷāhad が Inf. と構造をなす時のみであると思われる。というのは xʷāhad が ki-Cl. と構造をなす場合にこの形を未来時に属させようとする試みは今までになされていないし、我々も xʷāhad+ki-Cl. においては明らかに xʷāhad に「欲する」の意味を見出すことができ、したがってこの構造を未来時と直接関連させる必要は全くないと信じるからである。ENP の未来時に関しては次のような説がみられるが、組織的・統一的にこれを扱ったものはない。

Jensen は NP の未来時について次のようにのべている。¹⁸⁾ 未来時は xʷāhad+Inf. II で形成される。たとえば xʷāham kard ‘ich werde machen’。より古い言語では Inf. I も現われる。たとえば、

(7) xišti ki zi qālib-i tu xʷāhand zadan. (Umar-i Xayyām) “der Ziegel, den sie aus deinen Form bilden *werden*”.

さらに同頁の注にはこうのべている。「一般に短かくされていない不定詞 [=Inf. I] と結合した xʷāstan はより古い言語では独立の意味『欲する』(wollen), 『望む』(wünschen) をもっている」。例をあげれば、

(8) ci xʷāhi xarīdan? (Sa’dī) “was wünschest du zu kaufen?”

Lambton は古典ペルシア語では不定詞は時々 xʷāstan と用いられているとのべているがその例文はない。¹⁹⁾

Amin-Madani, Lutz は古典ペルシア語で xʷāstan が Inf. I, II と構造をなす例として次のような文をあげている。²⁰⁾

(9) agar xʷāhi āmadan, zūdtar bīrūn rau. (Kakīla u Damna (“Wenn du kommen *willst*, geh schneller aus!”

(10) miš u barra rā az gurg nigāh xʷāham dāšt. (Siyāsat Nāma) “Mutterschafe und Lämmer *will* ich vor dem Wolf beschützen.”

したがって Jensen は xʷāhad+Inf. I, II を一応は未来を表わす形式とするが、xʷāhad+Inf. I の xʷāhad はしばしば「欲する」の意味をとどめている、つまり未来の形式として十分は確立していなかったと主張するのである。Amin-Madani, Lutz は ENP の未来については言及していないので不明であるが、xʷāhad+Inf. I, II についてこうのべている。²¹⁾

「従属した動詞が今日では接続法の形で現われるのに対し、古典ペルシア語ではそれは Inf. I または Inf. II の形であられる」。そして (9), (10) の訳には ‘wollen’ がみられることから、彼らは ENP では xʷāhad+Inf. I, II が両方とも未来時としては十分確立しておらず xʷāhad

が「欲する」の意味をとどめていたと主張しているように思われる。彼らの主張は *xvāhad*+*Inf. II* の *xvāhad* にも「欲する」の意味を認める点で Jensen のそれとは相違している。

そこでまず同一動詞について *Inf. I* と *Inf. II* がみられる場合について考えてみよう。

d.1. *rūz-i raftan-i man nazdik ast u āmadan-i tu...nazdik xvāhad būd.* (p.6)

2. *hīc faxrī u nāmī turā naxvāhad būdan.* (p.83)

d では *Subj.* はいずれも無生物で *Subj.* の「意志」は認められない。d.1の *xvāhad būd* は現在時 *ast* と対比的に使われ、「私の行く(=死ぬ)日」の方が発話時に近く、「お前のくる(日)」は発話時から遠いことを表わしていると考えられるので *xvāhad būd* は未来を表わすものと思われる。

e.1. *Fath dānist ki bā āb pas naxvāhad āmad.* (p.18)

2. *illathā...bixvāhad āmadan.* (p.66)

e.1 は文脈から判断して「意志」が含まれているとは考えられない。e.2 の *bixvāhad* に「意志」の意味があるかどうかはあいまいである。

f.1. *cūn hujjatī bixvāhī dādan, tā naxust haqq ba dast nagīrī hujjat az dast madih.*
(p.99)

2. *agar kasī rā sila xvāhī dād, cūn andak bāšad ba zabān bar malā magūy.* (p.134)

f に「意志」をみとめるかどうかはあいまいである。黒柳教授は日本語訳で f.1 を「受けと²²⁾りを渡したかったら」、f.2 を「わずかな贈り物をしたいと思²³⁾ったら」と両方に「意志」をみとめておられる。

g.1. *cūn baza xvāhī kard, bāri baza-yi bimaza makun.* (p.40)

2. *har kārī ki xvāhī kardān, avval bā xīrad mašvarat kun.* (p.130)

f 同様あいまいである。黒柳教授の訳では g.1 は「どうせ罪を犯²⁴⁾したいなら」、g.2 は「なに²⁵⁾をしたいと思²⁵⁾っても」となっている。

h.1. *dānist ki mulk az xānadān-i išān bixvāhad šud.* (p.56)

2. *haqqī az ān-i vay bātil xvāhad šudan.* (p.92)

h はいずれも未来であると思われる。黒柳教授は h.1 を「王国が²⁶⁾一門から去ってしまうのを知²⁶⁾って」、h.2 を「その正当な権利が奪われようとする²⁷⁾」と訳しておられる。

d~h においてまず指摘されることは、未来を認めるにせよ認めないにせよ *Inf. I* と *Inf. II* をわけて扱うことはできないということである。d では明らかに *xvāhad* の後位置で *Inf. I* と *Inf. II* は自由変異の関係にあり互いに交換可能である。また f, g も同様であり、黒柳教授はいずれにも「意志」の意味を認めておられるが *Inf. I* と *Inf. II* を区別されてはいない。したがって Jensen の主張するように *xvāhad*+*Inf. I* の *xvāhad* にのみ「欲する」の意味をみとめることには十分な根拠がない。

dから判断して ENP に未来をみとめることは十分可能である。古代イラン語の時制体系の崩壊後の新しい現在時対過去時という時制の対立はすでに MP で完成しているので ENP で未来時が発達していたとみなすことに問題はない。

Jensen, Amin-Madani, Lutz や黒柳教授が未来時ではないとしている例をみると Subj. が 1 人称又は 2 人称である。(10) は 1 人称。(8) は 2 人称で疑問文。(9) f. 2 は 2 人称で条件文。ちなみに(7)には Inf. I があらわれるが Jensen はこれを未来としており、その人称は 3 人称。黒柳教授は Subj. が 2 人称の場合は必ず「欲する」の意味を認めておられる。cf. f, g. Subj. が 1 人称や 2 人称 (特に疑問文・条件文) の時には「欲する」(=意志) の意味があらわれやすいのではないだろうか。このようなあいまいさは「欲する」を未来の助動詞とした言語には必然的に伴うものと考えられる。(8) に対して英語の What will you buy?, (10) に対して I will protect them 参照。Amin-Madani, Lutz は (10) を未来ではないとするのに対し、次の MDP の文を未来としてあげている。²⁸⁾

(11) man fardā nazd-e šomā xāham āmad. “Ich werde morgen zu Ihnen kommen”.
(10) の nigāh xāham kard と(11) の xāham āmad との間に入ったような差があるというのであろうか。

これらの相違は結局材料の主観的解釈に由来し、上の場合 Subj. の人称と深く関連していると思われる。我々はむしろ次のような未来ではないと思われる例を指摘することができる。

i. 1 har banda ki furūxtan xvāhad u zan ki talāq xvāhad, bifurūš u talāq dih. (p. 67)

2. ānci bixvāhi furūxtan avval az nirx āgāh baš. (p. 100)

i. 1 では今までの例とは異なって Inf. I が xvāhad の前位置にあり、furūxtan 「売ること」が次の talāq 「離婚」と対比的に名詞として機能していることは明らかである。それゆえ xvāhad も「欲する」という意味を保持し、未来の助動詞ではありえない。これに対し i. 2 は furūxtan が後位置にあり、bixvāhi が「お前は欲する」か未来の助動詞であるかはあいまいである。

(12) Sahal bad-ān rūz ki bixvāst raftan, ba sarā-yi xvāja raft. (p. 127)

「サハルは出発したいと思ったその日に宰相の館へ行った」

(12) では Inf. I=raftan がアオリストではなく過去形 (bixvāst) と構造をなしており未来ではありえず、bixvāst は「欲した」を意味するとみられる。

(13) ānci xvāhīm kardan xvād bifarmāyīm u ānci naxvāhīm nafarmāyīm. (p. 127)

「我々はしたいことは自ら命じ、したくないことは命じない」

(13) の ānci xvāhīm kardan は g. 2 と同じくあいまいであるが第 2 の xvāhīm の後に kardan が略されているのが特徴的である。未来の助動詞としての xvāhīm の次の Inf. が省略されることは普通ありえないので、最初の xvāhīm も「我々は欲する」の意味であると考えられる。

ところで上の i は興味ある例を我々に提供している。i. 1 にみられるように Inf. が前位置

の場合は Inf. と名詞との平行関係は明白である。band ki *furūxtan* x^vāhad/zan ki talāq x^vāhad. したがって前位置の Inf. は名詞的であるといえる。ところが i. 2. *bix^vāhī furūxtan* のように後位置ではそのような平行関係はくずれている。ペルシア語は主語(S), 目的語(O), 動詞(V)がこの順に並おいわゆる SOV 語として動詞が文末を占めるのが正常な語順である。それゆえ Inf. の後置は単なる語順の転換にとどまらず, Inf. の機能的変質すなわち動詞の機能の増大をも意味したと考えられる。だから i). 1. *furūxtan x^vāhad* と i. 2. *bix^vāhī furūxtan* における Inf. *furūxtan* の差は, 前者が名詞と平行的であり, したがってより名詞的であるのに対し, 後者は一般の動詞に近づき, より動詞的であるという点にある。Inf. が名詞的であるということは x^vāhad が「欲する」の意味を保持していることを, Inf. が動詞的であることは x^vāhad が「欲する」の意味を失ない「助動詞」的になって行くことを意味する。上例で i. 1 を除いてすべて Inf. が後位置であるということは ENP で未来時が固有の形式を獲得し独立の地位を占めつつあったことを示している。

ところで MdP では Inf. I は x^vāhad の後位置では完全に消失し, x^vāhad+Inf. II のみが未来時の形式として一般化している。ところが Inf. I はこの構造外の「名詞的」機能においては保持されている。たとえば Subj. や Obj. として。これはつまり ENP の x^vāhad+Inf. における Inf. が機能的に分化していったことを示すものではないだろうか。すなわち他の所で名詞的に使われた Inf. I はそれによってあくまでもその名詞的性質を保持したがゆえに後位置におかれた「動詞的」Inf. と区別されるようになり, そのために消失の道をたどり, Inf. II が動詞的機能を単独でになるようになった。ENP では Inf. は一般に後位置であるとはいえ, Inf. I と Inf. II が競合し, 機能分化を完了させていなかった点において未来時が十分確立していなかったとすることができる。Inf. I と Inf. II をわけて扱うことは ENP ではあまり意味がないが, Inf. I は他の所で名詞的に使用されることがあったから, Jensen の言うように x^vāhad+Inf. I の方が x^vāhad の「欲する」という意味をよりとどめていた可能性はのこされている。

最後に x^vāstan 構造の歴史的推移を概観しておこう。

MP では x^vāstan は一般の他動詞と同じく Obj. を必要としたが Obj. として Inf. I も用いられた。むろん Inf. I は前位置である。²⁹⁾

(14) *kē marg pat ayāft hamē x^vāhēnd.* 「死を恵みとして望んでいるところの」

(15) *api-š hān x^varrah bē ayāftan x^vāst.* 「彼はかの栄光を得ることを望んだ」

ENP では Obj. が名詞(句)の場合は前位置であるが, Inf. の場合は上の例外的なものをのぞきすべて後位置である。ここではすでに x^vāhad+Inf. は未来時の形式として独立しようとしている。MP ではみられなかった ki-Cl. との構造が ENP では一般化しており, Obj. が名詞句の時には前位置, 節の時は後位置という語順がここでもほぼ確立しつつある。

MdP では ENP にあった Inf. I との構造が消滅し, x^vāhad+Inf. II が未来時の形式として

完全に独立した他は ENP の状況と全く同じである。

§5. 以上の考察をふまえて再び Inf. II の起源の問題にたちかえてみよう。我々は次のような事実を確認することができる。

bāyistan, tuvānistan, xvāstan は ENP では Inf. I, Inf. II 両方と構造をなしている。ENP にはこの他にも Inf. I, Inf. II 両方と構造をなす動詞として šayistan 「ふさわしい」、yāristan 「敢えてする」等がある。e. g. namiyāram xuftan (p. 145) 「私は眠る勇気がない」。また farmūdan 「命じる」という動詞もあるがこれは Inf. II と構造をなすことはないようである。e. g. āngāh kāsa farmāy nihādan (p. 37) 「それから給仕するように命じよ」。xvāstan のアオリストの後位置では Inf. I, Inf. II ともに生起するが過去形の後位置では Inf. II は生起しない。(cf. §4. (12))。したがって我々は Inf. II の生起する環境では Inf. I も生起しうるがその逆は成立しないと云う。

MP では abāyistan と構造をなす時以外は (cf. §2. (16)), Inf. II はあらわれずもっぱら Inf. I が用いられた。ENP では Inf. I と Inf. II が競合しているが、xvāstan のアオリストの後位置で両者の生起する数がほぼ等しいのに対し、bāyistan, tuvān(istan) は Inf. II と構造をなすことが圧倒的に多い。MdP ではこれらの動詞構造には Inf. I は用いられない。

Inf. の位置は、MP では abāyistan を除いて前位置の方が多いが、ENP では後位置が一般的である。特に Inf. II は前位置の例がなくすべて後位置である。

このような事実は必然的に我々を明らかな結論へと導く。それは Inf. II は Inf. I が後位置を占めるようになってからの改新である、つまり Inf. II は Inf. I が語末の -an を消失して生じたとする結論である。MP から ENP にかけて Inf. の位置の転換がおこり、後位置で Inf. I の -an を失った形 (= Inf. II) が出現する。後位置の Inf. はしだいに機能分化を行ってゆくが、それはやがて Inf. I と Inf. II という形態的な分化に結びついてゆく。それによって Inf. I は後位置では用いられなくなっていったのである。

ところで Šāhnāma には次の例があるという。³⁰⁾

guzar kard bāyad sū-yi šārsār. "man muss hinübergehen in die städtereiche Gegend." しかしこれは Šāhnāma が詩作されたムタカーリブという韻律上の制約のため bāyad kard の語順が転換されたものと考えられ、³¹⁾ Inf. II が bāyad の前位置に生起する例ではない。

たしかに Inf. II と同形の名詞が MP にも NP にも存在する。たとえば nišast<nišastan 「座る」。しかしこれらの名詞は特定の動詞についてのみ存在しその数は少ない。これに対し Inf. II は自由にどの動詞からも派生しうる。また上述のように Inf. II が機能的には「動詞的」であるのに対し、Inf. II と同形の名詞はあくまで名詞であってそのように機能する。したがって Horn の主張するごとく Inf. II と、Inf. II と同形の名詞とを同一視することはできず、後者

については別の起源が求められなければならない。

Darmesteter のように khvāham kard を古代イラン語 hvādāmi *kartim にさかのぼらせることは当然その中間の中世語にも *xvāham kart が存在したということを示唆する。ところが MP では kardan xvāham という形しか例証されていないし、Inf. II がここで広く用いられた形跡はない。すでに明らかなように Inf. II は MP をこえて OP にはさかのぼりえないのであり、MP においても abāyistan との構造などで部分的に発展した可能性はあるにせよ、一般に Inf. II は ENP の改新であるとする事ができよう。

注

* 本論は修士論文(名古屋大学、1975年1月)の第二章に加筆したものである。審査にあたり有益な助言を与えて下さった野村教授、水谷教授、国原助教授(当時)、矢野助教授の各先生方に厚くお礼を申しあげる。

- (1) 略語：OP=古代ペルシア語，MP=中世ペルシア語，ENP=初期近世ペルシア語，Acc.=対格，Cl.=節，Dat.=与格，Obj.=目的語，Subj.=主語
- (2) Lambton, p. 15.
- (3) Darmesteter, I p. 220.
- (4) Darmester, I pp. 229-30.
- (5) Salemann, p. 380.
- (6) Horn, p. 147.
- (7) 使用したテキストは R. Levy の編集したものである。Qābūs Nāma については、E. G. Browne, *Literary History of Persia*, Vol. II pp. 276-87 にくわしい。例文の訳には黒柳教授の訳を参考にさせていただいた。
- (8) Hübschmann, p. 120f.
- (9) この書名については M. Boyce, *Handbuch der Orientalistik* I, IV, 2, 1, Leiden/Köln, 1968, p. 48.
- (10) Nyberg, p. 25.
- (11) この例は Benveniste, p. 179^s による。
- (12) D. Sanjana, *The Kār-nāmē ī Artakshīr ī Pāpakān*, Bombay, 1896, II, 1(=p. 11).
- (13) Lyons, p. 392.
- (14) Nyberg, p. 196.
- (15) Nyberg, p. 196, s. v.
- (16) Nyberg, p. 196.
- (17) Nyberg, p. 196.
- (18) Jensen, p. 160.
- (19) Lambton, p. 144.
- (20) Amin-Madani, Lutz, p. 484, 492.
- (21) Amin-Madani, Lutz, p. 482.
- (22) 黒柳 p. 124.
- (23) 黒柳 p. 168.
- (24) 黒柳 p. 51.

- ㊦ 黒柳 p.162.
 ㊧ 黒柳 p.71.
 ㊨ 黒柳 p.115.
 ㊩ Amin-Madani, Lutz p.453.
 ㊪ Nyberg pp.221-22.
 ㊫ Jensen p.226.
 ㊬ 黒柳恒男『王書』平凡社, 1969, pp.441-42.

参 考 文 献

- Amin-Madani, S. & D. Lutz: *Persische Grammatik*, Heidelberg, 1972.
 Benveniste, E.: *Problèmes de linguistique générale*, Paris, 1966.
 Darmesteter, J.: *Études Iraniennes*, repr. Amsterdam, 1971.
 Haug, M. & E. West: *The Book of Arda Viraf*, repr. Amsterdam, 1971.
 Horn, P.: *Neupersische Schriftsprache*, in *GrIrPh*, repr. Berlin, 1974.
 Hübschmann, H.: *Persische Studien*, Strassburg, 1895.
 Jensen, H.: *Neupersische Grammatik*, Heidelberg, 1931.
 黒柳恒男『ペルシア逸話集』平凡社 1969.
 Lambton, A. K. S.: *Persian Grammar*, Cambridge, 1967.
 Levy, R.: *Qābūs Nāma*, E. J. W. Gibb Memorial Series, n. s. XVIII, London, 1951.
 Lyons, J.: *Introduction to Theoretical Linguistics*, Cambridge, 1971.
 Nyberg, H. S.: *A Manual of Pahlavi, II*, Wiesbaden, 1974.
 Salemann, C.: *Mittelpersisch*, in *GrIrPh*.